

た よ り



〒518-0814 伊賀市上友生785番地

TEL&FAX:0595 (21) 8839

URL:<http://www.iga.ed.jp/igaken>E-mail:iga-ken@iga.ed.jp

ICT 教育の影響について考える

ある保護者が話をしてくれました。「子どもが最近連絡帳を見せません。予定や宿題はタブレットに画像保存しているようです。自分で書いていれば気付けることもあるのに・・・。」と。

また、こんな話も聞きました。「子どもは授業がおもしろいと言っている。教科書に載っていないことを実験とかでやってくれる。でも、板書がないから、ノートも書いてないし、後で何をやったかあんまり覚えてないと言っている・・・。」と。



学校では、今タブレットを使うことは特別なことではなくなっています。

ですから、考えたいのは「使うか、使わないか」ではありません。何に使うのか、何は紙や鉛筆で続けるべきなのか、どこまで家庭で見守る必要があるのか。その部分です。

新聞に、熊本市教育委員会が行ったアンケート記事がありました。実に小学校教員の9割、中学校教員の8割が、端末の活用は授業改善に役立っていると答えています。児童生徒の側も9割以上が「学びが深まった」と感じています。わからないことをすぐに調べられる。考えを共有しやすい。写真や動画を使って、自分の考えを説明できる。そうした良さが授業改善に役立っているようです。

ただ、一方で気になる声があります。教員の半数以上が、「字を書く力が落ちた」と感じている点です。

タブレットは便利です。けれども、便利になった分だけ、ノートに正しく書く、文字を整えて書く、考えながら手を動かす時間が確実に減ってきています。入力できることと、書いて考えることは同じではありません。タブレットのおかげで早く答えにたどり着けます。けれども、迷う、比べる、書き直す、仲間の考えを聞いて考え直す、そうした時間の中にこそ、学びがあるように思います。

一人一台のタブレットは、学校の学びを大きく変えました。調べることも、共有することも、表現することも、以前よりしやすくなっています。

ただ、端末があるだけで学びが深まるわけではありません。書く力をどう育てるのか、紙とデジタルをどう使い分けるのか、考える時間をどう残すのか。こうした点をしっかり考えないと、子どもが考える時間、身につける時間を奪うことにもなりかねません。

タブレットが当たり前になった今こそ、便利さの裏で子どもや教師にどんな変化が起きているのか、そこを見落とさないことが学校にも家庭にも求められていると思います。

ぜひ学校現場で議論してみたいテーマの一つです。